

諏訪ノ森駅舎及び駅前交通広場等計画提案競技 諏訪ノ森の大きな木

01-1.はじめに

駅は多くの人の出会いや、生活の風景を演出します。

多くの人がくりひろげる多様な生活により、まちに活き活きとした生活の風景が生まれていくように、駅も多様に使い込まれながら、自分たちの駅へと変わっていくプロセスこそが、駅が人のための場、まちの「かお」へと変わるべきです。

旧駅舎での記憶を継承しつつ、新駅舎は特別な駅、自分たちの駅へとなり、未来のまちの成熟に向けた中心的な役割を果たします。

01-2.記憶を囲む、新駅舎・新駅前広場

旧駅舎を中心とし、新駅前広場を計画します。諏訪ノ森のアイデンティティである旧駅舎を中心とし、人々が憩う場所となる、「たまり」の空間を計画します。旧駅舎がつなに視界に入り込むようにベンチを配置し、旧駅舎を中心とした暮らしのシーンをつくり出します。駅舎の周りで起こる生活の場面に、旧駅舎がいることにより、諏訪ノ森での生活の記憶が未来へつながります。また、旧駅舎を包み込む大きな「」のように配置された新駅舎と新駅前広場が一体となり、新たな記憶の空間をつくり出します。



01-3.つながるまちの賑わい

踏み切りを含むまちの軸線には、まちの賑わいがあふれています。この軸線をさらに生かすために自由通路には賑わいを演出する仕掛けを施すとともに、仕上げを一部変えることにより、高架下利用空間と一体利用ができる、人々が集まる空間を計画します。また、この空間は駅前広場とも連続させ、駅前広場との一体化を創り出します。これにより、自由通路は通過機能と賑わい機能をもった、広場的な空間となります。



02-1.あたらしい諏訪ノ森のシンボル、つぎの百年へ
記憶に刻まれた旧駅舎に、新たなまちの「かお」の中心的な役割を担う機能をいれることにより、人々が集う場所に生まれ変わります。人々の記憶にある旧駅舎に集うことにより、まちの記憶を継承していくとともに、新駅舎とともに、あらたな諏訪ノ森のシンボルとして次の百年にむけ、生き続けます。

・旧駅舎を中心とした駅空間づくりの提案

『通路機能』から『気軽に立ち寄れるみんなのカフェ』へ空間を転換します。

新たなまちの「かお」を創り出す人々が集う・憩う空間になります。

・改修内容

ホームへ上の階段とスロープを取り外し、地面上から出入できるようにします。また、改修前の木製ホームベンチを備え付け、休憩スペースを設けます。

・旧駅舎の記憶

旧駅舎の立っていた場所を正確に新駅舎の床に表現し、旧駅舎の記憶を次の世代につなげます。



02-2.旧駅舎の再利用方法

・ホーム屋根【再利用】

新駅舎と一緒に利用し、庇としての機能を維持します。

・ホーム下の石積み【仕上げとして利用】

現機能とは別の駅舎周辺の植込み石や外構の仕上げとして有効利用します。

・ホームベンチ【機能として利用】

移設される旧駅舎に設置し、人々が自由に利用できるようにし、旧駅舎を利用していたという記憶を継承します。



03-2.新しいまちの顔となる新駅舎の特徴

・記憶を刻むファサード



旧駅舎の象徴でもあったステンドグラス。そのステンドグラスで使われていた色彩を抽出し新駅舎のファサードに刻みます。昼は外光を取り入れ内部空間を演出し、夜は駅から漏れる光がまちを照らします。また、外壁は磨ガラス等を打ち込んだ素材感のあるPC版で構成します。

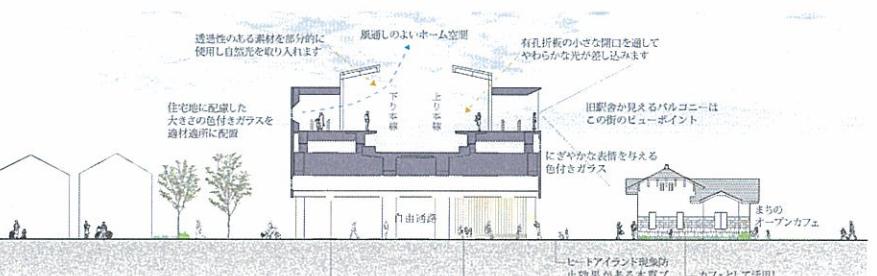
・記憶を囲むホーム



・色彩で演出するラチ内コンコース



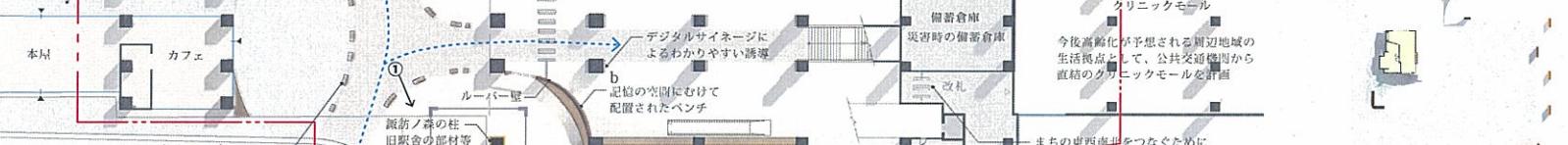
高架化によって新たな高さから街を見渡せる場所として、エスカレーターや階段付近はバルコニー空間とし、コンコース街のビューポイントをつくります。



03-1.駅前広場から新駅舎、自由通路へのつながり



・旧駅舎と一緒に空間をつくる仕掛け



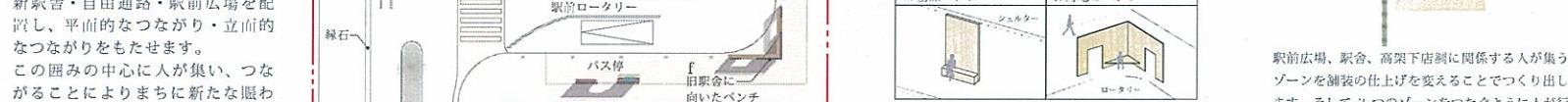
・旧駅舎を囲むベンチ



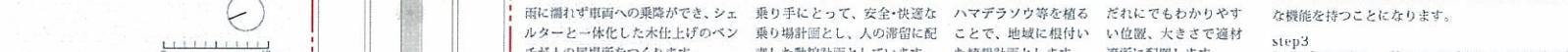
・仕上げの組み合わせでつくる4つのゾーン



・新駅舎と旧駅舎がつくる集いの空間



・シェルター



・バス・タクシー乗り場



・緑化計画



・サイン計画



・新駅舎の窓辺のベンチから旧駅舎を見る



・タクシー乗車場から新駅舎を見る

・新駅舎の窓辺のベンチから旧駅舎を見る

・タクシー乗車場から新駅舎を見る

・新駅舎の窓辺のベンチから旧駅舎を見る

